平成２６年度　学力向上アプローチ事業　研究指定校のまとめ　　別紙様式１

学校名 （児童数）	甲賀市立甲南第一小学校 （　３６５名　）

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：滋賀県甲賀市深川 1728 番地 1
電話番号：0748－86－2074

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

『授業改善で生み出す主体的な学び』
～「書く力」に重点をおいた言語活動の充実を求めて～

（２）研究主題設定の理由

昨年度の全国学力学習状況調査から明らかになった国語科における本校の重点課題は次の３点である。

① 目的に応じて資料を読み，分かったことを的確に書くことができるようにする。（国・知）
② 相手の立場や状況を感じ取ったり，話し手の意図を捉えたりして聞けるようにする。　（国・活）
③ 自分の考えを他の人に説明したり，文章に書いたりすることに抵抗がある。（質問紙）

これらの課題からは，本校の児童たちが学習に対して目的意識をもって主体的に取り組むこと，自分の考えや思いを的確に説明したり，書いて表現したりすること，相手の立場や状況を感じ取ったり，話し手の意図を捉えて聞くことなどについて弱い面があることがうかがえる。

現行学習指導要領において国語科では，言語活動の充実を図ることで日常生活に「生きてはたらく」国語の能力を身に付けることをねらいとしている。また，「生きてはたらく」言語能力は意図的に設けられた「聞く，話す，読む，書く」言語活動の過程において育つとも示されている。

そこで，現行学習指導要領の主旨と，本校の児童の課題から，本校の児童が学習に対して目的意識をもち，課題に対して主体的に取り組み解決していこうとすることを通して「生きてはたらく」言語能力を身に付け，高めていくことが必要であると考えた。

児童が目的意識をもち，課題に対して主体的に取り組み解決していこうとするためには，そのような態度が育つ国語科の授業を展開する必要がある。これまでの教師主導の受け身的な授業から，児童が課題を見つけ，解決していこうとする児童主体の課題解決型の授業への改善が不可欠である。また，そのような授業において，言語能力を高めるために目的のある言語活動の充実も欠かせない。

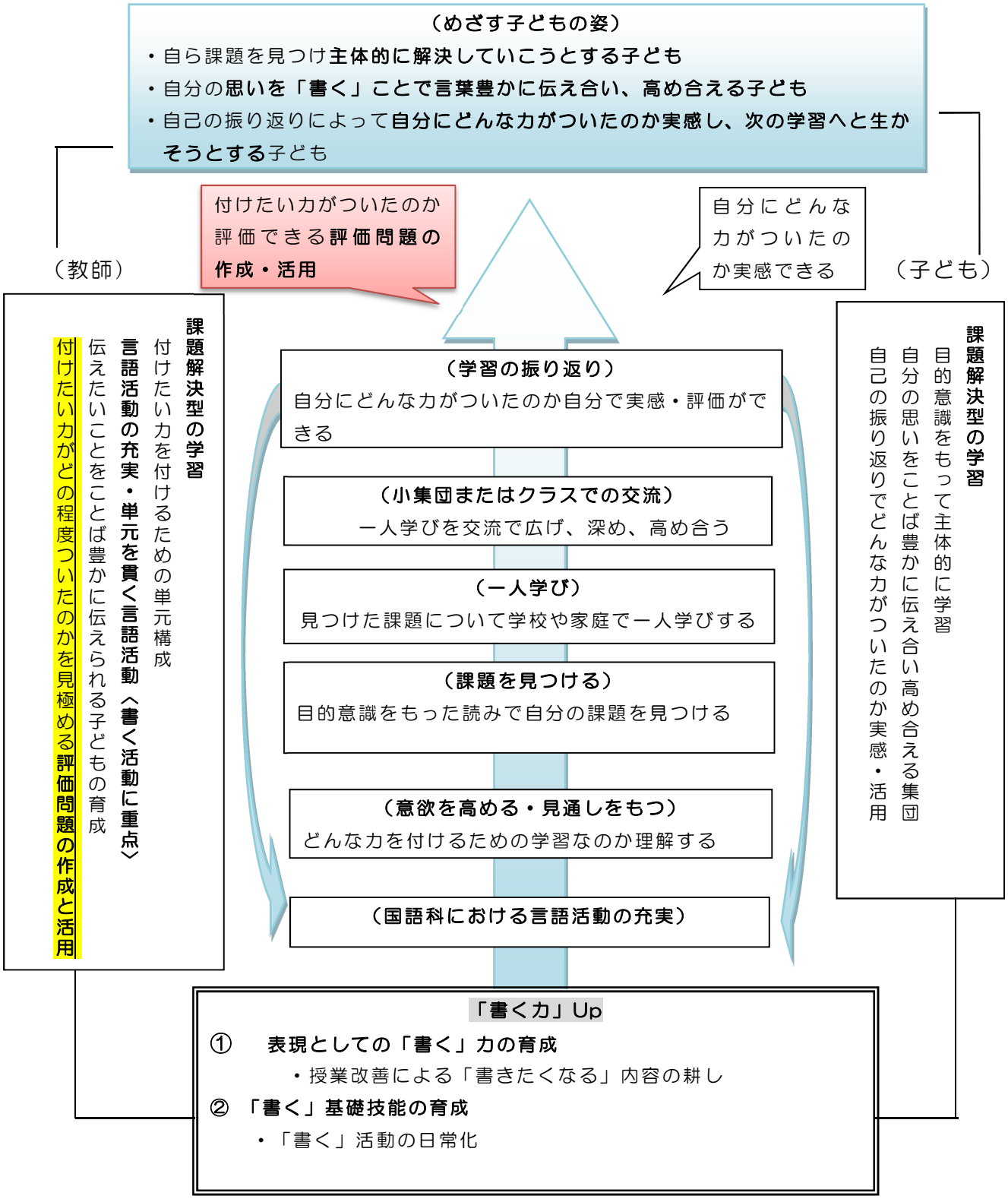
本研究では，言語活動の中でも特に「書く」活動に重点をおきたい。それは，本校の課題である目的に応じて資料を読み，分かったことを的確に書くこと，相手の状況や立場を感じ取ることと関連している。目的をもって文章を書くことで，自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えよう，納得してもらおうと，根拠を明らかにしながら書いたり，論理的に文章を書いたりする力が育てられる。その際，自分の考えたことを整理して順序立てたり，比較したり，また，根拠となる資料を読み直したりといった探究的な活動も期待できる。更に書いたものをもとに交流することができれば，多面的な考え方も知ることができ思考力も高まっていくと考える。

「書く」活動を習慣化し，「書く」活動と「読む」「話す，聞く」活動とを関連させた授業を展開することで，思考力を高め，「読む能力」や，「話す，聞く」能力などを含む

国語科の学力向上によい影響を与えると考える。

そこで，学力向上アプローチ事業 2 年次である今年度は，本校の児童の課題として挙げている「**書く力**」に重点をおき，付けたい力を意識した言語活動の充実を図る授業へと改善することで，目的意識をもった主体的な学びが展開され，学力向上へとつながるであろうと考え，研究主題を「授業改善で生み出す主体的な学び」と設定した。

（３）研究体制



（４）１年間の主な取組の経過

４月14日（月）第１回校内研究推進委員会
４月16日（水）第１回校内研究全体会
４月下旬　　全国学力・学習状況調査の自校採点
５月９日（金）　校内授業研究会　４年
「筆者の意見をリライトしよう～カブトガニを守る～」
５月12日（月）第1回　校内研修会（学力・学習状況調査分析）
５月26日（月）校内授業研究会（特別支援学級）
そま１ 国語科
・日常生活に必要な語彙を増やす
・形容詞の意味を知り，見つけることができる。
そま２国語科
・コミュニケーションに必要な語彙を増やす
・言葉を見つけたり，照合したりして品詞（名詞・形容詞・動詞・助詞の役割について知る）
そま３ 自立
・必要な物を考え仲間と一緒に作ることで自尊感情を高める
そま４ 国語科
・はっきりとした発音で話し，相手に伝える力
そま５ 自立
・手の力
・遊びを通してコミュニケーション力を高める
６月９日（月）研究推進委員会③
６月11日（水）校内授業研究会　３年生
「友だちが読みたくなるような紹介カードを書こう」
「ゆうすげ村の小さな旅館」　東京書籍　３年上
６月23日（月）研究推進委員会④
６月30日（月）校内授業研究会　　２年生
「大事なところを見つけて，1年生にもわかる昔の道具紹介カードを書こう」
「ふろしきはどんなぬの」　東京書籍　２年
７月29日(火)第２回　校内研修会(評価問題作成について)
８月　　各学年にて2学期評価問題作成
９月26日（金）　研究推進委員会⑤
10月21日（火）学力向上に関わっての訪問　久米指導主事
全クラス授業公開　指導講話
10月22日（水）研究推進委員会⑥
10月29日（水）　校内授業研究会　５年生
「Good（グッと）くるところ」を推せんしよう
「大造じいさんとガン」　東京書籍　５年

11月17日（月）研究推進員会⑦
11月21日（金）授業研究会　　６年生
「資料を効果的に使って，ごみをすてないように呼びかける文章を書こう
「資料を活用して書こう」東京書籍　６年

１月19日(月)研究推進委員会⑧ １月28日（水）　授業研究会　1年生 ことばあそびてんらんかいをひらこう 「ことばあそびをしよう」東京書籍１年 １月29日（木）研究推進委員会⑨ ２月４日（水）授業研究会　4年生 ２月18日（水）　校内研究全体会３ ２年次のまとめ

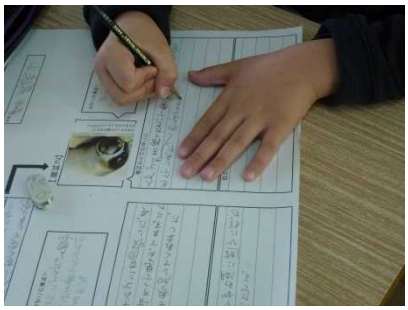
（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

◎評価問題の作成・活用～「書く」力の育成を意識～

・付けたい力はどんな力なのか，どのような問題ができればその力が付いたと評価できるのか，その力を付けるためにどのような学習を組むのかを考える。

○表現としての「書く」力の育成 ～授業改善による書きたくなる内容の耕し～

・絞った付けたい力と単元を貫く言語活動を計画する
・実践していき年間指導計画を作り上げていく。
・必然性のある「書く活動」を設定する。
・課題解決型の授業へと改善を図り「書く」に重点をおいた言語活動の充実を図る。
・付いた力を児童も実感できるような手立てを考える。
・学年で１つの研究授業を実施する。



自分の考えを書く（６年）

○「書く」基礎技能の育成～「書く」活動の日常化

・ことのはベーシックなどで思いや言葉や文章で伝えるスキルアップを図る。
・文型を意識した「書く」活動を取り入れる。
・文章を要約したり，字数や様式などの与えられた条件に即して書き換えたりする。言語活動を多く取り入れるなどの指導の充実を図る。
・児童の成果物も含め実践を残していく。

○日々の授業で「書く」力の育成・他の教科での授業改善や家庭学習の見直し

・単元での付けたい力を整理し，本時のねらいを明確にした授業を展開する。
・普段の授業でも授業の振り返り，まとめなどを取り入れるなど「書く」活動を意識的に取り入れ日常化し，自分の思いをことばや文章で表すことに抵抗感を無くしていく。
・家庭学習の内容を，Ａ予習的なもの　Ｂ復習的なもの　Ｃ学習の発展的なもの　Ｄ自分の興味あることを追究するようなものに分類することを教師が意識する。家庭での子どもの自発的な学びを引き出せるような単元の学習を仕組むことで受け身的な学習のみの家庭学習からの脱却を目指す。

書いたものを推敲する（６年）

＊全校で共通理解　・・・・学年×１０分

【研究成果と課題】

（１）研究成果

○評価問題を作成することで見られた成果

・付けたい力を意識した授業への改善が進んだ

これまでの研究では，付けたい力を意識した単元の構想や，それを貫く言語活動の設定に力を入れてきた。

今年度は付けたい力がどの程度ついたのかを測る評価問題を先に作成したのち，その付けたい力を付けていくための単元を構想したり，言語活動を設定したりするという方法を取り入れてみた。どの学年も 2 学期から国語科の市販のテストをやめ，評価問題を作成した。初めての試みで試行錯誤の連続ではあったが，評価問題を作成することでこれまで以上に児童に付けさせたい力は何なのか絞ること，どのような姿でその力が付いたのか判断するのかということ，その力を付けるためにどのような授業を展開するのかということについて，教師自身の授業作りの視点が焦点化した。

学習の流れを示す（５年）

また，児童にも学習の流れを説明する際に，どのような力を付けるためにどのような学習をしていくのか，具体的に説明することで児童自身が目的意識をもてるようになった。

・授業改善が学校改善へとつながった

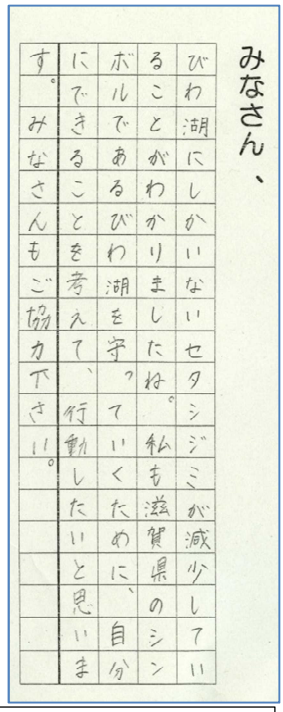
評価問題を作成するためには教材研究が欠かせない。教材文の分析や付けたい力の絞り込み，児童の実態，児童の成果物や授業で見せた姿など，放課後の職員室で話題に上ることが増えた。授業研究会においても本時のねらい達成できたのか，また，付けたい力を付けるための手立てについて有効であったかなど，具体的な児童の姿からポイントを絞って話し合いを進めることができた。

授業研究会で授業改善

○評価問題を活用することでの成果

・書く力を伸ばすことができた

評価問題にも書く力を伸ばせるような問題を設定するよう心がけた。字数や使う言葉など条件に合わせて書く問題や，自分の考えを入れて書く問題などがそれにあたる。どの学年の児童も最初は新しい問題形式に戸惑う姿を見せ，問題の意味，答え方などへの説明に時間をとる必要があったが，何度か繰り返すうちに記述式の問題へ慣れ，条件に合わせて書くことや自分の考えを入れて答えられる児童が増えてきた。



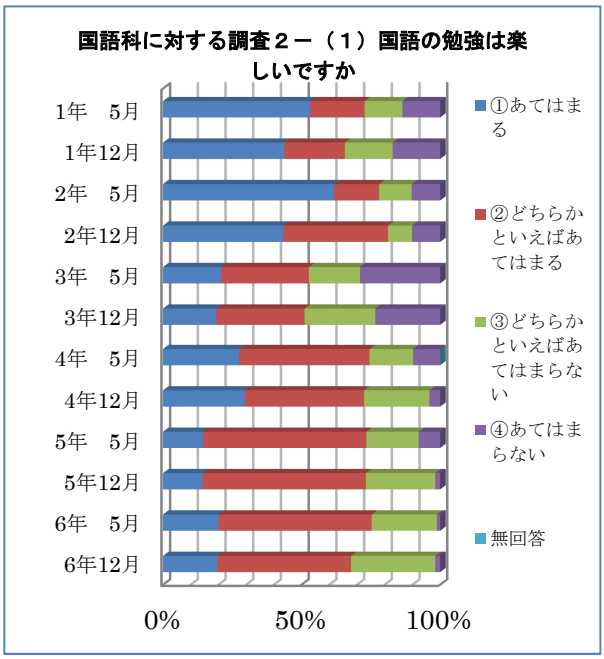
呼びかけの文章（６年）

○質問紙より見えてきた成果

・国語科の授業の変化

全校児童を対象に5月と12月に国語科に対する調査を行った。

調査２－（１）「国語科の勉強は楽しいですか」に対しての回答について考察してみる。

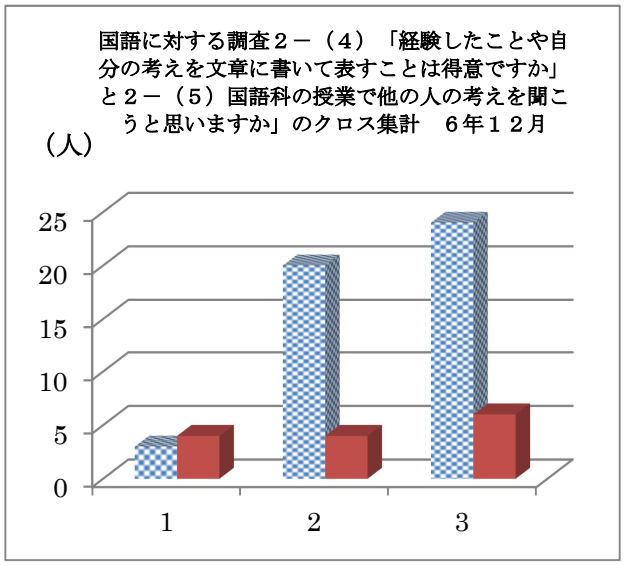


４段階で答えた児童の割合は，各学年とも，年間を通して大きな変化は見られなかった。その理由を見ても，「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と答えた児童は「漢字や作文や発表が苦手だから」「音読が苦手」「想像するのが苦手」という理由をあげることが多く，12月になってもその理由には，大きな変化は見られなかった。

しかし，楽しいに「あてはまる」や「どちらかといえばあてはまる」と答えた児童の理由に大きな変化が見られた。５月の時点では，その理由に「作文が好き」「人物の気持ちを考えるのが好き」「音読が好き」「漢字を覚えるのが好き」などを挙げていたのに対して，１２月になるとその理由を「漢字の成り立ちなどの調べ学習が楽しい」「物語文や説明文からの想像，まとめをすることが楽しい」「いろいろな勉強が楽しい」「二年一組発明事務所が楽しいから」「パンフレットやリーフレット作りが楽しかった」「作文を書くときにアイデアを交流したから書けたし，楽しかった」「友だちの意見を聞いてなるほどと思えるから」「いろいろな考え方があることが分かって楽しい」「班で話し合いをするのが楽しい」「話し合いができて深められる」「どう工夫をしたらどんな文が作れるか考えることが楽しい」など，具体的な授業内容を記述することが増えた。これらの理由からは，本校の国語科の授業の中に目的をもった活動が仕組まれていること，児童が学習活動に楽しく取り組んでいること，交流活動を通して学び合いをしていること，などがうかがえる。

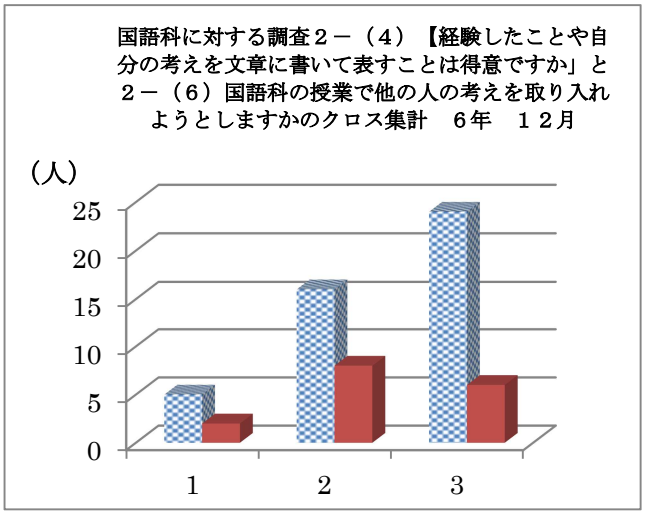
・交流について

本校が本研究で力をいれた「書く力」の育成について研究を進める中で，交流が欠かせないことが明らかになってきた。



授業研究会を重ねるごとにどのような目的で，どのような方法で交流を設定するのか，また，その交流の中でどのような言葉を児童が話していたらよいのか，具体的な児童の姿を教師が事前に思い描くことの大切さや，ポイントを児童に伝えることが交流を深めることの鍵となることも分かってきた。そのため授業にお

いても交流活動を多く取り入れるようにしてきた。



調査２－（４）経験したことや自分の考えを文章に書いて表すことは得意ですか」の問いの答えと**２－（５）「国語科の授業で他の人の考えを聞こうと思いますか」**のクロス集計のグラフや**調査２－（４）「経験したことや自分の考えを文章に書いて表すことは得意ですか」**と**２－（６）「国語科の授業で他の人の考えを取り入れようとしますか」**のクロス集計の結果からは，「経験したことや自分の考えを文章に書いて表すことが得意である」という問いに対して不得意だと感じる児童ほど，他の人の考えを聞いたり自分の考えに取り入れたりしようとすることがうかがえた。書くための情報集めの段階や，文章構成の段階，文章を書いている途中段階，書き上げた後の推敲段階など，それぞれの段階で交流タイムを取ることで，自分では行き詰まっていても友だちのアドバイスを聞いて書き進めることができたり，よりよい文章に仕上げたりすることができたなどといった姿を見ることができた。

（２）課題等

○評価問題についての課題

・評価問題についての吟味不足

評価問題については各学年で作成した。作成する際は，他の学年で作成した表か問題を参考にしたりどんな評価問題を作成したのか交流したりといいったことはできたが，複数の教師が評価問題についてじっくり吟味することができなかった。そのため実際に児童に解かせてみて答えにくい設問の仕方であることが分かったり，補足説明が必要になったりといった不具合もあった。今後は今年度作成した評価問題をもとに改良を加えること，付けたい力にあった評価問題であるか吟味すること等，複数の教師で検討し，評価問題の質を上げていきたいと考える。

・実施した後の分析の不足

実施した後，それぞれの児童がどのように力が付いたのか，付けられなかったのかを分析し，次の授業へとつなげることはできたが回答の類型や分析まではできなかった。

○「書く」基礎技能の育成

～「書く」活動の日常化～

・系統性を意識した「書く」活動の設定

授業改善が進み書きたくなる授業内容の耕しや，書く活動を日々の授業に仕組んでいくことはできたが，各学年で系統性を意識したスキルアップについては課題が残る点である。

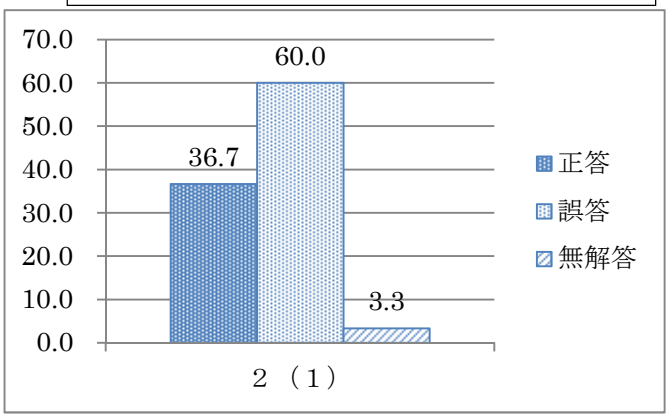
・評価問題の結果から見えてきた課題

六年生で実施した学力アプローチ事業の評価問題「フローティングスクールの問題」についての児童の結果分析から見ても，２－（１）のように条件に合わせて１文を２文に直すといった問題条件に即して書く問題での正答率は他の問題と比べても低い。

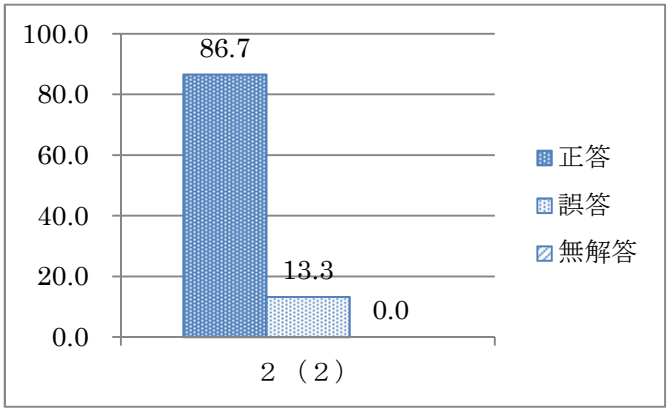
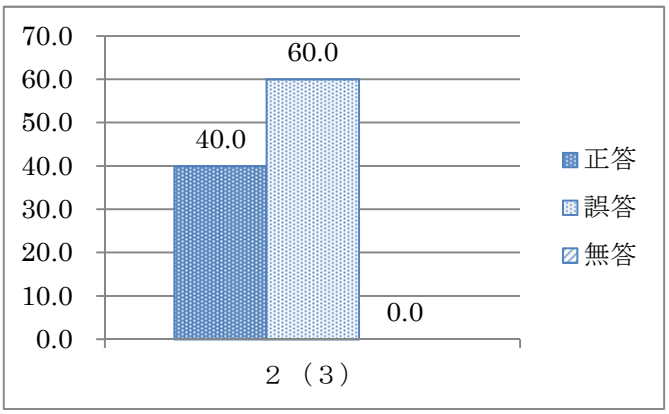
また，２－（３）のように読み取った事実を入れてみんなに呼びかける文章を書くなどといった，条件に合わせて書く問題については正答率が下がる。字数や使用語句等比較的単純な条件には適応できるようになってきたとは言え，設定された学習活動の流れに沿って資料を読み取ったり，相手を意識して自分の考えを文種に応じてまとめたりするなどといった活動にはまだまだ課題が残っていると言える。

これらのことからも，日常的な書く活動の実践を継続すること，系統性を意識した「書く力」のレベルアップを図れるよう計画・実践していくことの必要性を感じている。

評価問題２（１）条件に合わせて１文を２文に書き直す



評価問題２（２）提示するフリップの順を考える



評価問題２（３）呼びかけの文章を書く